北海道ヒストリア

2026.11.16

歴史・文化 # 十勝 # 豊頃町 # 帯広市 # 豊頃町二宮報徳館 # 晩成社 # 帯広百年記念館

晩成社の証人、渡辺カネ ――十勝開拓を語り継ぐ 【後編】

明治時代中期、英国人青年画家ランダーは、
道さえ通じていない十勝の開拓地で、流暢な英語を話す女性に驚いた。
その人の名は、渡辺（わたなべ）カネ。
横浜のキリスト教系女学校を出て母校の教師をしていた彼女が、
なぜ、開拓者になったのか。
十勝開拓の祖と称される晩成社（ばんせいしゃ）を、後世にどう伝えたのか。
ひたむきに生きた女性の生涯から、十勝が見えてくる。

文：北室かず子/写真：田渕立幸

なぜ大津が発祥なのか

十勝川が太平洋に注ぐ豊頃町（とよころちょう）大津（おおつ）。冬になれば海岸に打ち寄せられた「ジュエリーアイス」を見に多くの人が訪れる。その波打ち際のすぐそばに凛と立っているのが「十勝発祥之地」の碑だ。なぜ十勝最大の都市・帯広ではなく、大津が十勝の発祥なのか。

豊頃町大津にある「十勝発祥之地」の碑。茂みの向こうは「ジュエリーアイス」で有名な大津海岸だ。

その理由は、江戸時代にさかのぼる。大津には早くから漁場が開かれており、寛政11年（1799）、幕府が駅馬を備えている。明治13年（1880）には、十勝外四郡各村戸長役場が開庁し、十勝の行政の中心となった。なにしろ帯広は内陸部。交通路の未発達な当時、移住者は、大津沖に停泊した船から艀（はしけ）で大津に上陸し、十勝川を川舟で遡るしかなかった。

十勝川は、河口で十勝川と大津川の2筋に分かれて太平洋に注ぐ。その様子が2つの乳房のように見えることから、アイヌ語で乳房を意味する「トカプチ」と呼ばれ、十勝の語源となった。このように、歴史的経緯からも地名からも二重の意味で、大津は「十勝発祥之地」なのだ。

十勝川の河口。

十勝川に合流する旧大津川の河口付近。かつてはもっと大きな流れで海に注いでいた。

依田勉三は晩成社結成の前年、一人で北海道視察に訪れた際、大津の海岸から山の方に踏み込み、高いところから初めて十勝の大平原を眺めた。勉三はこれより前、小笠原諸島の開拓に関心を持ち、現地調査に行ったこともあったが断念している。焦がれるほど新天地を求めていたであろう勉三。そんな勉三の前に、十勝が姿を現した瞬間だった。

明治20年代には、大津に民家や倉庫が密集し、旅人宿、雑貨店、酒や醤油の醸造所が軒を連ねた。街路にはガス灯が点されていた。依田は物資の購入や受け取りなどで頻繁に大津に通い、晩成社の事務所も設けた。

面館の商店名が入ったそろばん。面館と大津は海路で強く結びついていた。豊頃町二宮報徳館所蔵

二宮尊親と勉三

豊頃には重要な移住者がいる。明治29年（1896）に移住した二宮尊徳（にのみや そんとく）の孫の尊親（たかちか）だ。地元では、敬意を込めて「尊親（そんしん）先生」と呼ばれてきた。尊親は、農民に勤労、倹約、互いに感謝し助け合う「報徳仕法（ほうとくしほう）」を教え、自らも開墾にあたった。

豊頃町には二宮報徳館があり、尊親が社長として率いた北海道ウシシュベツ興復社（こうふくしゃ）と、移民自らが結成した牛首別（うししゅべつ）報徳会による開拓の経緯がパネルでわかりやすく展示されている。

牛首別報徳会は、今年、結成130年。約60戸からなる二宮地区の全戸が構成員で、今なお報徳の教えを受け継いで活動している。

報徳仕法の提唱者・二宮尊徳の少年期の像（金次郎）。豊頃町二宮報徳館にて。

旧二宮小学校を改装した豊頃町二宮報徳館。

二宮尊親の開拓と、道内の多くの地域に広がった「報徳仕法」を学べる豊頃町二宮報徳館の展示。

カネの北海道への第一歩は大津海岸に印された。大津海岸は砂浜のため、艀を浜から引っ張って上陸させたことがわかる豊頃町二宮報徳館の展示。

晩成社との交流について教えてくれたのは、豊頃町郷土資料調査研究員の菅原裕一（すがわら ゆういち）さんだ。「依田勉三は尊親と交流がありました。伊豆では早くから報徳の教えが普及していて、勉三もその影響を受けて育ったのです。明治33年2月には馬橇（ばそり）で興復社出張所（現・豊頃町茂岩）を訪問しています。勉三は、報徳思想の4つの基本原理である、至誠、勤労、分度（ぶんど：身の丈をわきまえること）、推譲（すいじょう：生活の中で余った分を将来や社会のために譲り与えること）を晩成社の経営に生かしたとされています」。

菅原さんは元豊頃町教育長。郷土の歴史を伝えたいと、定年後、研究員を務めている。

明治30年代、大津は十勝に移住する人々でにぎわっていた。この頃、大津から積み出されたのは、マッチ軸木、大豆、塩鮭。それに対して大津に陸揚げされたのは、白米、大麦、酒、たばこ、砂糖、呉服、昆布、果実、小麦粉、麺、塩、味噌、醤油、菓子、紙、陶磁器、石油、ろうそく、畳、綿、金物、縄、莚（むしろ）、薬など、あらゆる生活物資だ。これらは移住者に飛ぶように売れた。大津は、移住者にとっての玄関であり、物資補給基地でもあった。

カネは老後、長女一家とともに、北見、東京を経て、昭和20年（1945）の暮れに帯広で息を引き取った。

カネと娘たち。帯広百年記念館所蔵

十勝川の河口は海霧に包まれていた。その乳白色のもやの中、港ヨコハマの香りをまとった女性を乗せ、川をさかのぼっていく小舟が見えた気がした。やがて十勝の都となるオベリベリへ向けて。

十勝川河口付近に群れるウミネコ。

海霧がかかった茫漠たる風景をカネも見ただろうか。

時が止まったような十勝川河口付近。

INFORMATION

豊頃町二宮報徳館

住所	豊頃町二宮2460 Google Map
電話番号	015-574-3126(二宮報徳館)、015-574-3126、015-579-5801(豊頃町教育委員会)
開館時間	9:00～16:00
休館日	月曜・水曜・金曜・日曜、年末年始（12月28日～1月3日）
入館料	無料
アクセス	豊頃駅から約12km
関連リンク	https://www.toyokoro.jp/site/kyouiku/6655.html

※情報は取材時のものです。最新情報は各公式サイト等をご確認ください。

この記事の《前編》を読む 2026.10.05公開
この記事の《中編》を読む 2026.10.26公開
北海道ヒストリア 記事一覧はこちら
この記事をシェアする

Copyright © Hokkaido Railway Company all rights reserved. No reproduction or republication without written permission.